

## 2018年度 関西学院初等部 学校評価を終えて

関西学院では、2008年度に初等部が開校して以来、初等部・中学部・高等部が共同し、一貫性のとれた学校評価制度を構築し、互いに連携を取り、学校評価の実施と結果の公表に取り組んできました。

2010年度からは、幼稚園から大学院まで連なる関西学院の強みを生かし、接続する学校の先生方に、専門的な視点からのご意見を伺うことで第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。

2018年度の初等部の取組は、「キリスト教主義教育」「教育課程・学習指導」「生徒指導」「研修（資質向上の取組）」の4項目を重点として、評価項目を設定しました。

評価の実施にあたっては、各項目について児童、保護者、教員にアンケートを実施し（回収率①児童99.7%、②保護者76.3%、③教員100%）、それぞれの立場からの回答を得ることにより客観性を確保するとともに、回答者個々の意見も重視するよう努めました。

次に、アンケートの集計結果を分析するとともに、各重点項目についての初等部の取組状況を教職員が総括し、今年度の取組に分析、評価を加え、今後の改善の具体的方策を示し、初等部の自己点検・評価としました。

さらに、それらについて接続する学校関係者の関西学院幼稚園長、中学部部長、教育学部准教授及び評価情報分析室副室長の専門的視点に基づくご意見を「第三者評価／学校関係者評価」とし、合わせて初等部の学校評価としてまとめました。

本日、関西学院評価推進委員会（2019年3月15日）において、初等部の学校評価が協議・承認されました。

初等部は関西学院がめざす世界市民の育成にむけた全人教育の土台を培う大切な役割を担っていることをしっかりと自覚し、子どもたちが生涯にわたって“Mastery for Service”の体現をめざしていけるよう、教員の力量を高め、保護者の理解と協力を得て、より質の高い教育活動を展開しなければなりません。

関西学院初等部として、本学校評価を真摯にとらえ、教職員一人ひとりが自らの課題を探り、組織としてその課題解決に向かって取組を進め、今後もさらなる改革を図ります。

2018年度初等部の学校評価を項目別に次頁以降に記し、ホームページ上で公表することにより、社会的信頼を高めるよう努めたいと考えています。

2019年3月15日  
関西学院初等部  
校長 田近 敏之

## 学校評価

### 教育理念・使命・目標

#### 【教育理念・使命】

キリスト教主義教育に基づく全人教育の「はじめの一步」を担う。

#### 【目標】

キリスト教主義教育を土台とした「建学の精神」を体得し、スクールモットーである“Mastery for Service”の実現をめざし、知性・情操・意志を備えた児童を育てる。

#### 【初等部聖句】

「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた」

[意志]

[知性]

[情操]

### 2018年度の評価項目

- ・キリスト教主義教育  
初等部の教育の根幹をなすため、評価項目として設定した。
- ・教育課程・学習指導  
教育理念にふさわしいカリキュラムを編成するために、この項目を設定した。
- ・生徒指導  
児童が安心して生活できる学校づくりをめざしているため、この項目を設定した。
- ・研修（資質向上の取組）  
より質の高い授業の実現を図るため、毎年の評価項目としている。

### 2018年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育 【キリスト教主義に基づく、たくましい生き方の育成】	自己評価	A
目標	建学の精神に基づき、キリスト教主義教育を初等部のあらゆる教育活動の中で展開し、児童がキリスト教の精神やスクールモットー“Mastery for Service”の精神を体得できるようにする。そのためにすべての教員、また保護者がその精神について共通理解をもち児童に向き合えるようにする。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>（具体的な取組の状況）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初等部はキリスト教主義教育を、年間約 200 回の朝の礼拝（月曜日から金曜日）、全学年週 1 時間の聖書科授業、特別礼拝、各宗教行事を土台とし、児童・保護者・教職員が建学の精神を共有し、様々な教育活動の中で展開している。</li> <li>・保護者に対しては全学年保護者対象の「聖書講座」「教育講座」をはじめ、PTA活動との連携による「聖書と讃美歌に親しむ会」（各学年ごとの開催）でキリスト教主義教育の理念を共有する機会を設けている。また児童と共に礼拝を守る機会を提供している。さらに新入生の保護者に対しても、入学前の 2 回のオリエンテーション、入学後のオリエンテーションで、初等部のキリスト教主義教育について講話を行い、入学前よりキリスト教主義教育の理念を共有する機会をもっている。</li> <li>・教職員に対しては「キリスト教研修会」の実施、教師会等の会議においても、適宜キリスト教主義教育の理念を共有する機会をもっている。</li> </ul>		

	<p><b>(取組の効果に対する評価)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童アンケート質問2「こころの時間や聖書の時間は、あなたにとって大切な時間だと思いますか」に対する肯定的な回答は94.2%であった。この数値からも児童の中にキリスト教主義教育が深く浸透してきていることが分かる。約200回の朝の礼拝を初等部全体で大切に守ってきた結果と考える。</li> <li>・保護者アンケート質問3「学校は、キリスト教主義教育の理念について、保護者と共有する機会を設けている」に対しては肯定的な回答が96.6%という結果であった。「聖書講座」「教育講座」「聖書に親しむ会」などの保護者対象講座が定着してきたことが高評価の理由と考えられる。また保護者アンケート質問4「学校は、キリスト教主義に基づき、人を思いやる気持ちや態度を育てている」との質問に対しても、肯定的な回答が91.6%と昨年度より増加している。高い数値を示しているが、この数値がさらに増加するような学校づくりをしていくことが必要である。</li> <li>・教員アンケート質問1「私は、礼拝や研修を通してキリスト教教育の理念を共有している」に対する肯定的な回答が5年連続100%と全員が肯定的な回答をしている。また教員アンケート質問2「学校はキリスト教主義教育を学校生活の中で具体化している」との質問に対しても肯定的な回答が同じく100%となっている。教職員がキリスト教主義教育の理念を共有し、自らがキリスト教主義教育の担い手であるという自覚をもって初等部の教育の働きを担っている。</li> </ul>
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校評価アンケートの結果を通して、キリスト教主義教育が大部分の児童・保護者・教員に肯定的に受け止められていると考えられる。開校より11年であるが、関西学院が129年間大切に守ってきたキリスト教主義教育の理念が初等部にも浸透していることが分かる。肯定的な評価が高いことに満足することなく、1年1年、より深く、より充実したキリスト教主義教育を展開していくために、すべての教職員が関西学院の建学の精神であるキリスト教主義教育やスクールモットー“Mastery for Service”への理解をさらに深めていく。</li> <li>・関西学院のミッションステートメントを教育活動の土台に据え、自分たちこそがキリスト教主義教育の担い手であるという意識をもつことのできる学びの機会を研修や会議の中でこれまで以上に大切にもつ。</li> </ul>

<p>評価項目 【テーマ】</p>	<p>教育課程・学習指導 【真理を探究する確かな学力の育成】</p>	<p>自己評価</p>	<p>B</p>
<p>目標</p>	<p>「キリスト教主義に基づく全人教育による人間形成」を念頭に「各教科の特性や児童の興味・関心に応じた教育課程の工夫」また、「学力の的確な把握の上の学習指導」「豊かな情操を育む芸術文化活動」をめざす。</p>		
<p>具体的な取組の状況とその効果に対する評価</p>	<p><b>(具体的な取組の状況)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・シラバスを見直し、教科の特性を踏まえた身につけさせるべき学習内容、児童の興味関心を鑑み、重点を置くべき単元や学習内容の時数を工夫するなど、より効率的なシラバスの作成に努めた。</li> <li>・研修委員会の進める研修目標を念頭に、「全員参加」「全員理解」の授業づくりに努めた。</li> <li>・高学年における教科担任制を行い、教科の専門性を深めた授業、児童の的確な学力把握に努めた。</li> <li>・「KGタイム(こころの時間・風の時間・力の時間・光の時間)」では、教科学習では得られない領域や、より重点を置きたい内容に特化した学習を行った。</li> <li>・特に風の時間では「書くこと」、力の時間では「論理的な思考力」の育成をめざした。</li> </ul>		

- ・「光の時間」においてはネイティブとのTT（ティーム・ティーチング）授業を行い、学習環境を整え、様々なコミュニケーションスキルの習得に努め、表現力を磨いた。また、6学年ではカナダコミュニケーションツアー（CCT）、4学年では大学留学生との交流会を実施し、コミュニケーション力の向上とともに、異文化交流を通じた国際理解教育にも努めた。
- ・「的確な学力把握」をするために、通知書における評価規準の見直しや学習での振り返りを行った。また、学習到達度を測るために期末テストの実施や、相対的な評価を知るために実力テストを実施した。
- ・全校で取り組む大きな学校行事「体育祭」「音楽祭」「作品展」「マラソン大会」を実施している。これらについては特別時間割を設け、児童がよりその目標に集中して取り組めるように学習環境を整えた。また、本物に触れる機会として全校児童対象に「文化芸術教室」を実施した。

#### （取組の効果に対する評価）

- ・児童アンケート質問4「授業は、楽しいですか。」の問いに 89.2%の肯定的評価が得られたことは大きな成果である。さらに児童アンケート質問3「授業では、新しいことをたくさん知ることができますか。」では 91.5%、児童質問アンケート質問5「授業はわかりやすいですか。」では 92.9%の肯定的評価が得られた。授業づくりについて工夫した成果だといえる。
- ・保護者アンケート質問8「学校は、基礎的知識や技能が定着する授業を行っている。」では、84.3%、保護者アンケート質問9「学校は、基礎的知識や技能を活用する場面を入れた授業を行っている。」では、80.9%の肯定的評価である。比較的高い評価を得ていると思われるが、前年度からは微かであるが下がっている。しかし、一方で保護者アンケート質問10「学校は、楽しく分かりやすい授業にするために工夫をしている。」では 90.9%と高い肯定的評価を得ていることは評価できる。おそらく、「基礎的」といった部分を授業づくりで見落とししている可能性があるのではないか。今一度、保護者が子どもに付けてほしい学力とは何かといった保護者の学力観を把握することが必要になっているのではないかと考えている。
- ・「的確な学力把握」については、保護者アンケート質問5「学校は、子どもの学力を把握している。」では肯定的評価 87.3%、保護者アンケート質問6「学校は、子どもの学力を保護者にきちんと伝えている。」86.3%、となっている。この二点について、昨年度と比較すると、質問5については 0.2%、質問6については 4.5%の増となっている。この点については懇談時での丁寧な説明や日頃からの保護者との連携の中での成果だといえる。
- ・教員アンケート質問3「私は、児童の客観的な学力把握に努めている。」では、93.1%、教員アンケート質問4「私は、評価基準により、的確な評価を行っている。」では 100%の肯定的評価である。いずれも高評価であるが、保護者との認識の違いがある。教員は日々児童の学力把握について努め、児童に寄り添い、保護者との連携を図らなければならない。
- ・「KGタイム」について、児童アンケート質問7「『風』の時間は好きですか。」では 88.1%、児童アンケート質問8「『力』の時間は好きですか。」では 87.5%の肯定的評価である。昨年度比では質問7では、3.0%減、質問8では 16.8%増となっている。保護者アンケート質問 11「学校は、『風』の時間を通して、豊かに言葉を使える力を育てている。」では 83.4%、保護者アンケート質問 12「学校は『力』の時間を通して、論理的に思考する力を育てている」では 81.8%の肯定的評価であった。保護者アンケートによれば、「風の時間」も「力の時間」

	<p>についても前年度比ではポイントを上げている。一方教員アンケートでは質問8「学校は、『風』の時間を通して、豊かに言葉を使える力を育てている」では80.0%、質問9「学校は、『力』の時間を通して、論理的に思考する力を育てている」では70.0%の肯定的評価にとどまっている。力の時間については、高学年での「力の時間」における専科制の定着による時間の確保と児童の学力把握が大きな理由になっているのではないかと考えられる。しかし、「力の時間」「風の時間」についてはその学習内容はもちろん、そのあり方についてよりよく考えていく必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「光の時間」については、児童アンケート質問9「英語は好きですか。」では59.3%の肯定的評価と低い。前年度比から5.3%の減である。保護者アンケート質問13「学校は、英語教育を通して、英語によるコミュニケーション能力を育てるとともに、基本的スキルを定着させている。」70.2%となっている。前年度比では3.4%減である。前年度は保護者アンケートで8.4%の増があり、ALT（アシスタント・ラーニング・ティーチャー）とのTT授業の定着と考察した。改めて、英語教育についてはさらなる学習環境の整備と学習内容の充実を図らなければならない。</li> <li>・学校行事については全校で取り組む大きな4つの行事について、開校から試行錯誤しながら創り上げてきたものであり、10年目を迎え一つひとつの行事が伝統を創り上げ始めていると感じている。児童アンケート質問10「音楽や図工は好きですか。」では90.8%の肯定的評価を、保護者アンケート質問14「学校は、音楽、美術（図工）を中心として芸術教育を通して、子どもの豊かな感性を育てている。」では92.6%の肯定的評価を得ている。こうした芸術的教科については苦手意識のある児童も多くいる中、これだけの肯定的評価を例年保つことは日々の授業づくりと、その成果を発揮する場所である「音楽祭」「作品展」といった学校行事との結びつきが強いと考える。また、「体育祭」においても同様である。</li> </ul>
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2020年度新学習指導要領実施を見据えた各教科シラバスの見直しを行う。</li> <li>・「KGタイム」の抜本的見直しを行う。</li> <li>・「光の時間」におけるこれまでの振り返りを踏まえた、学習内容、学習環境、時数等の見直しを行う。</li> <li>・さらに教育的意義のある宿泊的行事を検討する。</li> </ul>

<p>評価項目 【テーマ】</p>	<p><b>生徒指導</b> 【児童が命の大切さを実感し、よりよい人間関係を築くことができる指導を進める。】</p>	<p>自己評価</p>	<p>A</p>
<p>目標</p>	<p>キリスト教主義教育に基づいて指導にあたり、生命の大切さを重んじる心、互いを思いやる心を持つ児童、また、社会の一員として責任ある態度を持ち、よりよい生活を築いていこうとする児童を育てる。</p>		
<p>具体的な取組の状況とその効果に対する評価</p>	<p><b>(具体的な取組の状況)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童に対し、安全確保の必要、命の大切さや仲間づくりの良さなどが意識できるような取組を学校生活のあらゆる場面で続けてきた。朝の礼拝、聖書科をはじめとする授業、学級活動、体育祭や音楽祭といった全校行事などのすべての機会である。</li> <li>・PTAの役員会、校外委員会を中心とした各委員会、学年学級代表と連携し協力を仰ぎながら、児童の学校生活がより安全で、より豊かなものになるように進めてきた。特に6月の大阪北部地震発生は、児童が校内にいたり、登校中であつたりした時刻に起きたため、児童の安全確保、安全な下校について最大限</li> </ul>		

の配慮をしつつ、保護者に明確な情報を即時的に伝えることを最優先して取り組んだ。保護者にはそれぞれの事情がある中でも児童の引き渡しに積極的に協力してもらうことができた。

- ・今年度から渋滞緩和の観点から通学路の一部変更を行ったため、教師による立哨体制を強化し、1学期のスタート時には通常の立哨に加え、学事委員が毎朝通学路の要所で指導をおこなった。PTA登下校サポートでも校外委員会と協力し、立哨位置を精査し、児童の見守りがよりよく反映されるような体制を整えてもらうことができた。これまで同様、関西学院同窓会宝塚支部の有志の方々に構成されるスカイレンジャーズの皆様による見守りを受け、安全確保に努めることができた。
- ・仲間づくりでは新たに2学年をペア学年（1・6年、2・4年、3・5年）と設定し、毎日の清掃活動を同じ場所で共に協力しながら取り組むようにした。ペアランチとして、ペア学年で昼食を一緒に食べる機会を持つようにして、互いをより知り、豊かな人間関係づくりが進むような活動を取り入れた。
- ・校長室会、教師会では、学事委員会から日々の生活指導案件や児童の様子、時期に合わせた生活指導の要点などを伝え、事前の指導を強化することにも重点を置いてきた。
- ・今年度から取り入れた毎日の縦割り清掃では、異学年の児童が一つの担当場所を協力して掃除するようにした。上級学年には責任感、下級学年には仲間意識の高まりが感じられた。
- ・すべての児童にすべての教員が関わるために必要な児童情報交換会を研修委員会の運営のもと、5月と10月の2回行った。5月は新学年での様子や周囲の状況について、10月にはそこまでの頑張りや変容などについての情報を共有した。
- ・朝の礼拝（こころの時間）では、全教員が2または3回の講話を担当した。宗教主事の指導の下、キリスト教主義教育に基づいて生命の大切さを重んじる心、互いを思いやる心などについて、それぞれの切り口で伝えてきた。また、学級活動や体育祭や音楽祭などの行事に際しては、学年、学級単位で協力すること、助け合うことなど仲間づくりに関しての指導を行い、高学年では児童同士で対話し考えるといった活動でより主体的によりよい人間関係を構築することができた。
- ・避難訓練は火災（5月）、水害（9月）、地震（11月）の3回、さまざまな災害に備えておこなった。特に6月の大阪北部地震を受け、11月の地震避難訓練は従来とは違い、事前予告なしで昼休みの時間帯に実施した。ほとんどの児童が放送に耳を傾け、真摯に安全に避難できた。
- ・登下校での安全指導については、全学年が学期に1度ずつ計3回の学年下校指導をおこなった。下校前にそれぞれの学年での課題や“めあて”を確認し、ルールや安全に気を付けながら下校した。また、今年度は、年間3回の地区班集会と1・6年生のペア下校を行った。地区班集会でそれぞれの通学経路での課題や安全確保の方法、車内態度やエチケット、マナー、そして初等部のルールについて確認、指導してきた。1・6年生だけがペアでの下校を行い、6年生が1年生の登下校の不安をやわらげ、安全を確保して仲良く下校することができた。安全を意識する具体的な場所でその都度、上級生から教えてもらうことは1年生にとって有意義であった。

#### （取組の効果に対する評価）

○今年度、重点を置いてきた「命の大切さの実感」「よりよい仲間づくりの育成」

については、全教員が意識を高めてきたということができ、アンケート結果として過去4年間でもっともよい数値が出ていることから、保護者にもその取組が伝わっており、児童の振り返りも同様でその成果を見ることができる。

- ・児童アンケート質問 13「学校で、命の大切さやなかまの大切さなどについて学んでいますか。」に対する「強くそう思う」「どちらかというばそう思う」では、96.1%が肯定的な回答をしている。(2017年度 94.4%)
- ・保護者アンケート質問 17「学校は、命の大切さや望ましい仲間関係の育成などについて、指導している。」では、88.5%が肯定的な回答をしている。(2015年度 85.1%→2016年度 87.7%→2017年度 84.9%)
- ・教員アンケート質問 13「私は、命の大切さや良好な人間関係をつくることなどについて、学校生活の中で指導している。」では、100%が肯定的な回答をしている。(2015年度 96.3%→2016年度 100%→2017年度 100%)

○アンケート結果からは全教員が配慮しながら指導に取り組んできており、保護者にもその取組が届いていることがわかる。しかし、児童がより具体的な場面を想起した時に、友達への言葉がけや気遣いがまだ十分ではないと感じていたり、自らの配慮に向上の余地があると考えていたりすることがわかる。

- ・児童アンケート質問 14「思いやりのある友だちが多いですか。」では、83.7%が肯定的な回答をしている。(2017年度 86.0%)
- ・児童アンケート質問 15「友だちが困っていたら、助けていますか。」では、88.0%が肯定的な回答をしている。(2017年度 89.6%)
- ・児童アンケート質問 17「相手の気持ちを考えて行動することができていますか」では、83.6%が肯定的な回答をしている。(2017年度 87.4%)
- ・保護者アンケート質問 18「学校は、子ども同士の人間関係に配慮しながら指導している。」では、80.3%が肯定的な回答をしている。(2014年度 69.2%→2015年度 78.0%→2016年度 83.7%→2017年度 76.8%)
- ・教員アンケート質問 14「私は、児童間の人間関係を円滑にするための配慮、指導をしている。」では、100%が肯定的な回答をしている。(2015年度・2016年度・2017年度 100%)

○今年度、保護者が「学校がルールやマナー、挨拶など生活指導について進めている指導」について理解を示し、評価していることが過去4年間の保護者アンケートを振り返り、比較することで読み取ることができる。ほとんどの教師が生活指導内容に関して適切な指導を心掛けてきた成果であるといえる。しかし、児童の「挨拶」に関するアンケート結果が昨年とほぼ横ばいであることに比べ、児童が「学校のきまりを守る」ことについての肯定的な回答の割合は昨年より 7.3%下がり、看過できない低い数値となった。自分に厳しい振り返りをする児童がいるのも事実ではあるが、実際、通学時のトラブルや一般の方からの苦情、校内でのきまりを守らない様子が見られることもある。

- ・児童アンケート質問 11「学校のきまりを守って生活していますか。」では、79.8%が肯定的な回答をしている。(2017年度 87.1%)
- ・児童アンケート質問 12「だれにでも元気よくあいさつをしていますか。」では、88.7%が肯定的な回答をしている。(2017年度 90.5%)
- ・保護者アンケート質問 15「学校は、集団生活に関するルールやマナーについて

	<p>適切な指導をしている。」では、90.8%が肯定的な回答をしている。(2015年度 83.3%→2016年度 87.4%→2017年度 86.0%)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者アンケート質問 16「学校は、しっかりと挨拶ができるように指導している。」では、85.1%が肯定的な回答をしている。(2015年度 83.9%→2016年度 84.3%→2017年度 83.2%)</li> <li>・教員アンケート質問 12「私は、挨拶や時間厳守など、社会生活をする上での基本的なマナーが児童に身につくよう適切に指導している。」では、96.6%が肯定的な回答をしている。(2015年度 100%→2016年度 100%→2017年度 96.7%)</li> </ul>
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活指導は学校生活のあらゆる場面で行われなければならない。特に、礼拝や講話、授業、学校行事などの場面で命の大切さや仲間づくりの良さを意識した取組を今後も続ける。児童の安全確保や安全への意識の向上、よりよい生活習慣の確立、豊かな仲間づくりを進めるためには、保護者の協力が必要となる。今後もPTAの役員会、各委員会と連携し、協力を仰ぎながら進めていく。</li> <li>・今後想定されている災害や突発的な事象に対しては、学校としてよりよく対応できるよう、常に最新の情報に基づいて見直しを進め、児童が自らの安全を優先に行動できるように進めていかなければならない。特に、通学時に大規模な災害が起きた時に備えての手立てを早急に考えていく。</li> <li>・児童同士のかかわりの中で、互いの良さや関わり合いの大切さをより実感できるよう、教師が時や場面、場所などを捉えて、よい働きかけにはその良さが実感できるような賞賛や評価を伝えることが肝要である。</li> <li>・初等部の全教員が全ての児童に関わり、たくさんの目で児童を見て、成長に関わっていくことが大事である。そのためにも、教師間で様々な機会をいかして情報を共有していく。</li> <li>・依然として教員の取組や意識には差異がみられる。それは結果的に学年、クラスでの差異となってみられるようになる。開校11年を過ぎた今、改めて関西学院のキリスト教主義教育を振り返り、そこに基づいた生徒指導をすべての教員が同様に展開できるよう取り組んでいく。</li> </ul>

評価項目 【テーマ】	研修（資質向上の取組） 【“Mastery for Service”の体現 ～かかわり合いの質を高める～】	自己評価	B
目標	<p>ミッションステートメントの主旨には、「他者への関心と思いやり」が“Mastery for Service”を支えるとある。「他者と対話し共感する能力」を持ち「よりよい世界を創造」することが我々のミッションである。初等部での教育活動が、こうした力の獲得をめざすものであることを常に確認し続け、それに応えうる教員集団としての資質向上をめざす。</p>		
具体的な取組の 状況とその効果 に対する評価	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全国の教員及び一般希望者に対して、初等部の授業を公開する(2/16)。約500名の参加者に対して、合計22本の授業を公開した。授業に向けては複数回模擬授業形式での検討会を行った。また、新学習指導要領に関する対談や、奈須正裕教授(上智大学:文科省学習指導要領解説者)や塚本勝巳名誉教授(東京大学)を招いての講演・対談などを企画した。すべての公開授業で事後検討会を開き、参加者と意見を交流し、「かかわり合い」が成功しているのかどうかに焦点をあてた。</li> <li>・年間3回、それぞれ1名ずつの教員による公開授業(大授業)を実施した。全教員で事前検討会を開き、模擬授業形式で指導案を吟味。授業参観の後、事後検討会を行った。協議を踏まえ、授業者は「もう一度同じ場面で授業を行うな</li> </ul>		



ら」という仮定に基づいて指導案を改訂したうえで「Before After 指導案」を提出した。

- ・全ての教員による公開授業を実施した。事前検討会を行わず、見学した教員(学年団の教員は必ず見学する)とのリフレクションを行った。大授業同様に「Before After 指導案」を提出した。
- ・研修委員会としてのテーマ設定の元、各教員が個人研修テーマを掲げ授業づくりに臨んだ。個人研修テーマは授業の指導案にも示され、それぞれの教員が自らの課題克服に取り組んでいる。
- ・研修委員会から提案したリストの中から書籍を選択し、各学年で座談会を開いた。あらかじめ課題本を読み、それぞれの学びを共有した。

#### (取組の効果に対する評価)

- ・児童アンケート質問1「学校は楽しいですか。」に対して93.1%(前年度90.0%)の児童が肯定的評価(強く思う+どちらかといえばそう思う)を示している。また、児童アンケート質問5「授業はわかりやすいですか。」に対して92.9%(前年度91.1%)と微増した。児童アンケート質問6「授業では、自分から進んで、友だちと話し合ったり、考えたり、まとめたりしていますか。」の肯定的評価が80.1%(前年度77.6%)となり、数値を伸ばしたことは研修の求める方向性と一致する。ただし、「かかわり合いの質」を研修テーマに掲げている初等部としては高い数値とは言えず、さらに上げたい項目と言える。気になる項目は児童アンケート質問14「思いやりのある友だちが多いですか。」で83.7%(前年度86.0%)と肯定的評価の数値を下げ、同様に児童アンケート質問17「相手の気持ちを考えて行動することができていますか。」でも83.6%(前年度87.4%)と肯定的評価の数値が下がっている。こうした項目は“Mastery for Service”の体現をめざす初等部として下げてはならない項目である。もう一度、授業・学校生活全般を通して他者意識を高めていく必要がある。
- ・保護者アンケート質問2「初等部の教育には満足している。」では89.9%が肯定的評価を示し、前年度89.2%から微増。また、保護者アンケート質問6「学校は、子どもの学力を保護者にきちんと伝えている。」の項目は86.3%となり、前年度81.8%に対して数値を伸ばした。保護者アンケート質問10「学校は、楽しく分かりやすい授業にするための工夫をしている。」の項目では前年度と全く同じ90.9%の評価を受け、教員の努力が認められている。実際、教員アンケート質問4「私は、評価規準により、的確な評価を行っている。」の項目の「強く思う」の数値が27.6%(前年度23.3%)と上昇している。教務の成績処理ファイルの改善によって、より適正な評価につながっているという意識が生まれていると考える。
- ・このように初等部教育は基本的に高い水準で評価を受けているが、保護者アンケート質問8「学校は、基礎的知識や技能が定着する授業を行っている。」の項目で肯定的評価が84.3%(前年度85.7%)、保護者アンケート質問9「学校は、基礎的知識や技能を活用する場面を取り入れた授業を行っている。」の項目で80.9%(前年度84.4%)となっていて、どちらも数値を落としている。特に活用場面の評価が低下していることは、初等部の強みが活かしておらず、重く受け止める必要がある。
- ・教員アンケート質問7「私は、授業研究を積み、児童が魅力を感じる授業を展開できるように努めている。」が96.6%(前年度100%)となっている。ここは100%をめざしていく。また、この項目において「強く思う」と答えた教員は前年度と同じ43.3%であり、よりよい授業づくりに対する熱量をさらに上げ

	ていく。新学習指導要領の新しい方向性も理解した今、具体的な授業改善に精力的に取り組むことが必要である。
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「対話的で主体的な、深い学び」とは新学習指導要領でうたわれている新しい学びのキーワードである。われわれがめざしてきた「かかわり合いの質の高さに支えられた学び」そのものと言ってもよい。「深い学び」とは他の学びに転移できる資質能力を獲得することである。こうした学びを実現するためには、まずそれぞれの学級が親和性の高い人間関係を構築する必要がある。リーダーが固定せず、多様な意見が生まれ、新しい見方考え方が生まれる授業デザインを意識し、全教員が実践を出し合う。</li> <li>・同時に、「学級の自治力」を向上させる方策を具体的に練る必要がある。教員が出るタイミングや子どもたちだけでは到達できないステージに導くことは常に必要だが、児童が主体的に取り組める授業を開発する。各教員による意欲的な実践を積み上げる。</li> <li>・学級が安心感を持ち、間違いが新たな価値を持つ集団として育つ方法について研修を行う。また、学級の自治をめざす初等部として、特別活動やその中の学級活動などをいかに推進するのかという研修を行う。全ての児童がリーダーとなりえる活動のあり方を教員団として共有する。</li> </ul>

(自己評価)

A+=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。

## 総合評価

初等部のキリスト教主義教育については、多くの保護者と子どもにしっかり浸透している。初等部の教育のベースだけに、今後も地道に取り組んでいく。

授業については、教師の工夫が保護者や子どもから評価されている。教員の授業研修への意識の高さが成果をあげている。しかし、「風の時間」「力の時間」「光の時間（英語・国際）」については、どのような力を子どもが身につけているかがわかりにくい状況となっていることがうかがえる。今後の課題である。

生徒指導に関しては、担当中心に教員全体で発達段階に応じて具体的に指導しているが、規範意識向上に関する指導は、より充実していく必要がある。

児童アンケート質問1「学校は楽しいですか。」では、93.1%が肯定的評価をしている。保護者アンケート質問2「初等部の教育には満足している。」では、89.9%が肯定的評価をしている。いずれも年々評価が高くなってきている。キリスト教主義を土台とした建学の精神やスクールモットー“Mastery for Service”を大切にされた教育が児童や保護者に理解、評価されていると考えられる。

## 2018年度の評価をふまえて2019年度に予定している評価項目、テーマ等

キリスト教主義教育  
教育課程・学習指導  
生徒指導  
研修（資質向上の取組）

### 第三者評価／学校関係者評価

- ・キリスト教主義教育が、大部分の児童・保護者・教員に肯定的に受け止められていることはとても評価できます。キリスト教主義教育を実践していくうえで、この事はとても重要です。毎朝、全校児童、教職員がチャペルに集い礼拝を守ること、保護者対象の聖書講座、教育講座、聖書に親しむ会など、これからも誠実に続けることを願います。
- ・授業では、「対話的で主体的な学び」となるよう、教材を工夫し、授業をされている取組が見られました。初等部がめざしている「かかわり合いの質の高さに支えられた学び」が実践されるように今後さらに期待しています。
- ・休憩時間に図書室にいる児童の多さに驚きました。読書をする事、本を借りることが日常的になっていることは素晴らしいことだと思います。
- ・作品展では、どの児童の作品にも個性があり、自分で創意工夫しているプロセスの分かるものでした。一人ひとりを大切にする日々の授業の取組だと評価できます。
- ・今後も今まで同様に、児童一人一人は神様に愛されている存在であることを心に留め、そして児童一人一人のことを全教員で教育する、温かく見守る意識をさらに高め、多角的な視点で情報共有をし、具体的に取組を積み重ねることを大切にしたいと思います。

全体として妥当な評価が行われていると思います。教員アンケート、児童アンケート、保護者アンケートの結果も概ね肯定的評価が高く表れており、キリスト教主義教育、教育課程・学習指導、生徒指導、研修の取組が一定の成果をあげていることがうかがわれます。

一点だけ気になるのは、「光の時間」（英語）に関する児童アンケート、保護者アンケートでの評価の低下です。幼児期における英語へのアクセス状況など、児童の間に英語力の格差が存在し、英語に馴染んできたものにとっても、英語に初めて触れるものにとっても、現状の「光の時間」に満足できない状況が生じているとも考えられます。評価が低下している原因の分析には、児童、保護者への直接的な聞き取りをはじめ、より詳細な調査による実態把握が求められているのではないのでしょうか。

「英語の関学」というブランドイメージは初等部にも無縁ではなく、保護者の期待も大きいと考えられます。「光の時間」の成否は、初等部のブランドイメージを直接に左右する可能性のある重要課題であると考えられます。十分な意識のもとに、現状把握、原因分析、改善方向の明確化を進めていただきたいと思います。

アンケートの結果は、全般的に良い結果でした。各項目の評価が高いことに、教職員による日々の研鑽を感じることができます。

児童を対象としたアンケートでは、質問1「学校は楽しいですか。」という問いにおいて肯定的回答が93.1%、質問5「授業はわかりやすいですか。」は92.9%、質問3「授業では、新しいことをたくさん知ることができますか」は91.5%、質問10「音楽や図工は好きですか。」は90.8%という値になっており、高く評価できます。

児童アンケート質問9「英語は好きですか。」という問いにおいても、肯定的回答が62.3%であり、悪くない結果だと言えます。ただし、4割弱の児童が英語の授業に苦手意識を感じていることは、2015年度、2016年度、2017年度の結果とほぼ同じでした。昨年度と比較すると、より低くなっています。英語の授業の何が「好き」という回答から遠ざけているのか、何が「わかりやすさ」の達成を難しくさせているのかについて、児童、保護者、教員という三つの観点から分析・検討し、改善に向けた学びの場を具体的に設定する必要があります。英語教員だけでなく、他教科・他領域を専門とする教員との連携のもと、子どもたちが「知的にたのしい」と思える英語の授業が求められます。

授業や休憩時間の様子を参観していると、どの児童の表情にも明るさや積極性を見てとることができました。キリスト教主義教育、学級経営、生徒指導、教科指導等の取組が充実しているのだと想起されます。

気になる点として、児童を対象としたアンケートとして「授業では、自分で進んで、友だちと話し合ったり、考えたり、まとめたりしていますか。」という問いにおいて、2割弱の児童が否定的な回答をしている点です（あまりそう思わない17.7%、まったくそう思わない2.2%）。ペア学習やグル

ープでの話し合い活動など、教育の方法としては、すでにさまざまな工夫が授業で行われているかと思えます。今後は既存の教育方法に加えて、各教科・領域において「他者とかかわること」自体の意義や難しさについて考えると、教育の目標や内容をコミュニケーションの観点から再編し、実践していくことが必要な作業だと思われまます。このことは、インクルーシブ・コミュニティの構築をめざす関西学院の方向性とも合致します。児童が「日常生活における必要性」と「知的な楽しさ」を感じる事ができる授業の展開を期待しています。

また、これまで関西学院初等部では1クラス30名・3クラス（各学年90名）の児童数ですすめてきましたが、参観していると、中期・長期的な目標として、1クラス20名～25名の児童数で新たに構成することも検討すべき段階にあるように思いました。フィンランド等、欧州の学級の在籍者数は20名前後がスタンダードです。在籍者の数の少なさが、児童の学力の高さと相関関係にあることも日本で検証されています。質問6「授業では、自分で進んで、友だちと話し合ったり、考えたり、まとめたりしていますか。」というアンケートの問いは、授業方法というミクロ的な視座で検証することは継続して必要なことですが、制度というマクロ的な視座で検証することも欠かせません。40名や35名を軸とする公立小学校との差異化を図る意味においても、学級の在籍者の数については、関西学院全体で検討すべき案件のように思います。

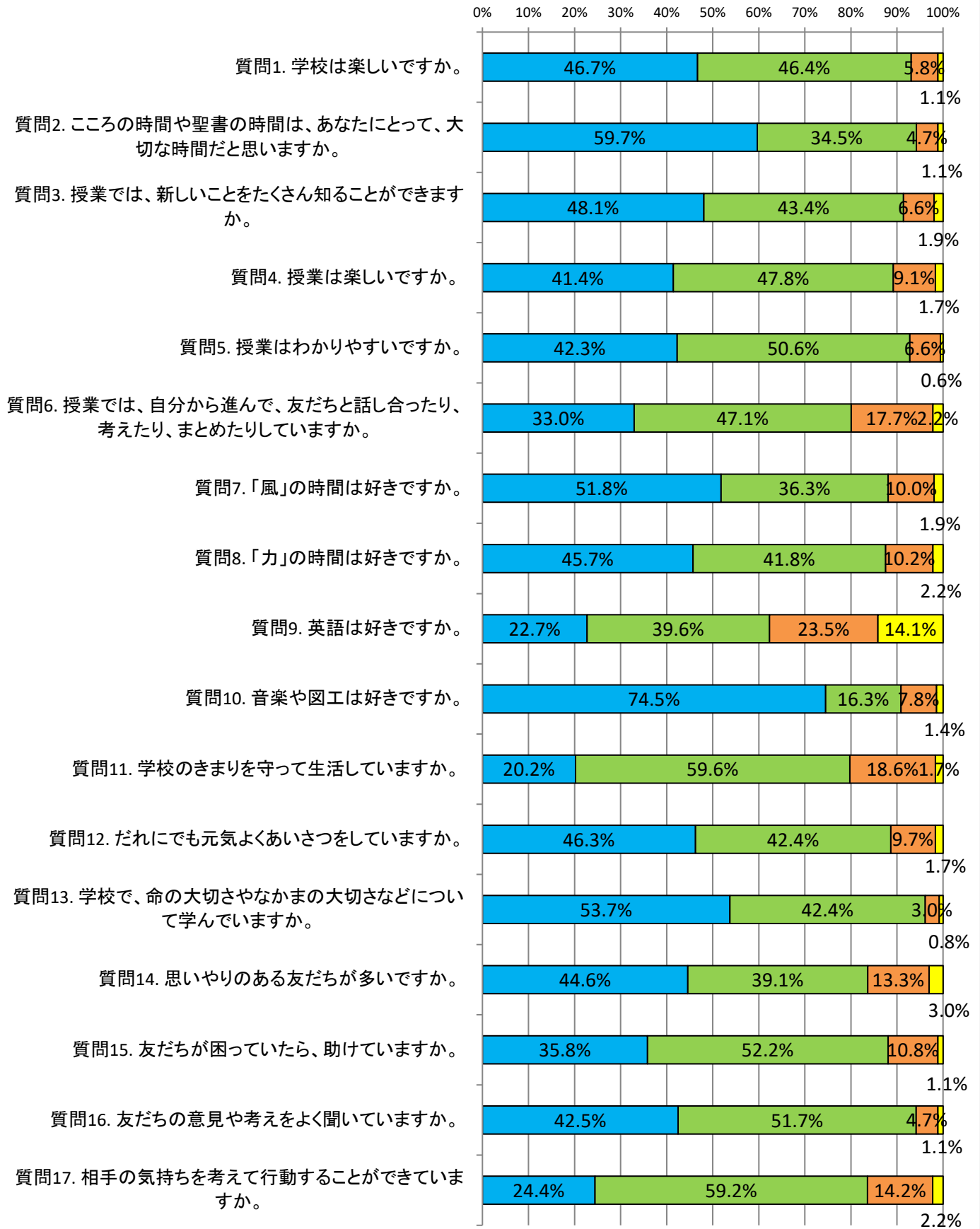
初等部のキリスト教主義教育は、私自身も何度も礼拝に参加させていただいており、先生や児童たちによるメッセージにはいつも感動させられています。児童アンケートの%の高さは、キリスト教主義教育が根付いている証拠です。また保護者への聖書講座・教育講座はじめ熱心に取り組んでおられることも高い評価に繋がっているが理解できます。キリスト教主義教育をしっかりとされているおかげで、中学部に入学してからも、大きな声で賛美歌を歌い、奉仕活動にも熱心に取り組んでくれる生徒たちの姿が多くみられます。高校、大学へ上がっても、その姿は変わらないでしょう。

小学生に対する英語教育は難しいのかなと実感します。子供たちは基本的には英語は好きだと思っているので、興味を持たせ、成果を上げる工夫を何とか続けていかれるような今後の取組に期待します。生徒指導に関して、登下校の見守りからとても熱心に学校をあげて取り組んでおられます。また、小学校ならではの縦の関係を重視して、上級生に責任感とやりがいを育てる教育が素晴らしいと感じます。避難訓練も年3回しっかり実施しておられるところも高く評価できます。

初等部の先生方は、本当に研修をしっかりとされておられるので、その成果をこれからも存分に生徒たちとの学びの中で生かしていかれることを心から期待し願っています。

2018年度学校評価

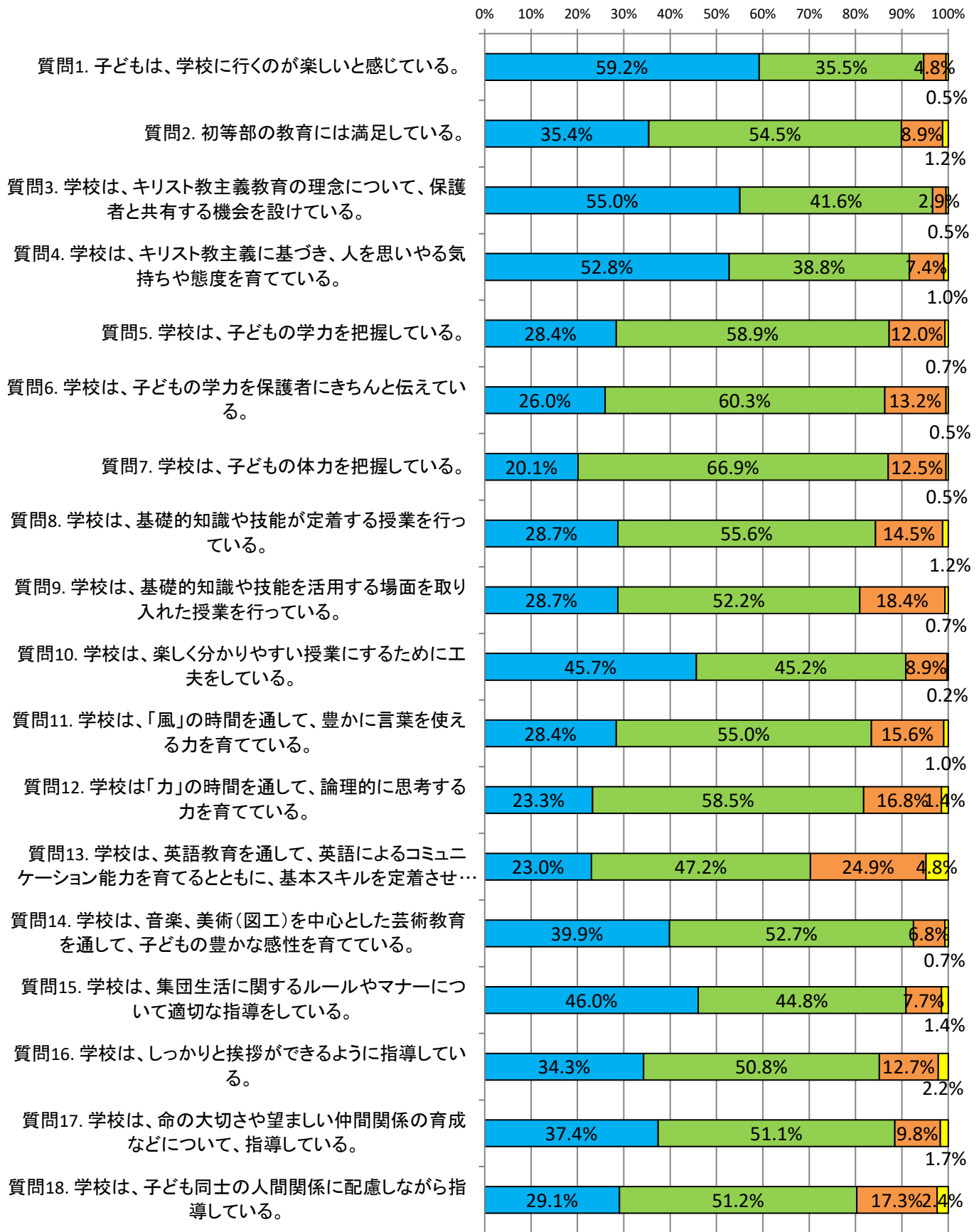
2018年度 学校評価アンケート集計結果  
初等部・児童3年生～6年生（回収率 99.7% 362人/363人中）



■ 回答番号1: 強く思う ■ 回答番号2: どちらかといえば思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったくそう思わない

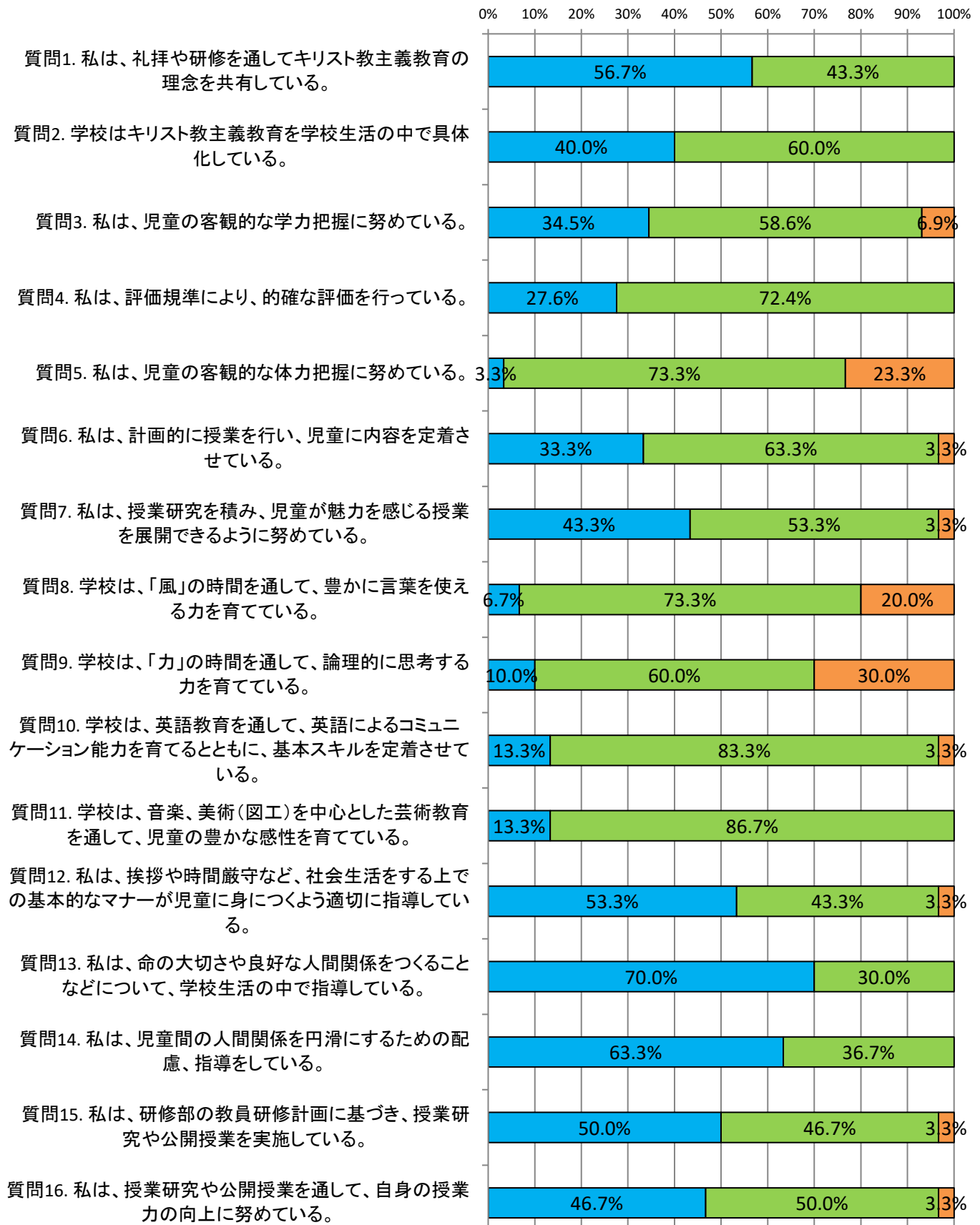


2018年度 学校評価アンケート集計結果  
初等部・保護者（回収率 76.3% 417人/546人中）



■ 回答番号1: 強く思う ■ 回答番号2: どちらかといえば思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったくそう思わない

2018年度 学校評価アンケート集計結果  
初等部・教員（回収率 100% 30人/30人中）



■ 回答番号1: 強く思う ■ 回答番号2: どちらかといえば思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったくそう思わない